

# ゲーテの山岳紀行

Goethes Reisen durch die Gebirgslandschaft

## 須磨一彦

### 要旨

ゲーテはドイツ国内のハールツ山地の盟主ブロッケンに三度登頂し、スイスの山岳紀行も三度敢行し、さらにイタリアの噴火活動中のヴェスヴィオ山の溶岩流を足元で観察し、シチーリアのエトナ山の一角にあるロツソ山登頂にも挑んだ。これらの山岳紀行の皮切りは一七七五年夏のことであるから、初の遠征には相応しい時節であったが、その後一七七七年一二月には、冬のプロッケン山に二週間かけて単独登頂した。林業や鉱業の従事者にとつてさえ、冬山の登頂は危険なだけで無用な業であった。アルピニズムはまだ普及していない時代だった。ゲーテにとつてブロッケン山への関心は第一にファウスト伝説との関係であった。そして、このブロッケン登山は、創作活動としての『ファウスト』に結実した。それから一年半ほど経って、一七七九年九月から、今度はカール・アウグスト公を誘って第二の故郷となつていたスイスへ四箇月に及ぶ長期紀行の途に就いた。ゲーテの山岳紀行の目的は、「自然との親和」であり、人生と創造活動の要としての自然との親和であった。ルソーや同時代の牧歌詩人たちが、この親和への動機となつたことは否定できないが、真の成果は回り道をして現われるものである。この間の主たる踏査地は、ベルナーアルペン西部のチンゲル氷河、ジュラの最高峰ラ・ドール、一月に入つてシャモニーからローヌ谷に下り、フルカおよびゴットハルト峠を経てルツェルンへ出るが、最後の数日は降雪や吹雪に見舞われた。この旅では、ゲーテは主従の対話をなにも伝えておらず、個人的な自然観察とその体験に筆先を絞っている。

## キーワード

自然との親和

## 序

ゲーテは一七四九年八月にフランクフルト・アム・マイン市で生まれた。父母は、ライプツィヒ大学で法学を修めたがこれといった公職に就かなかったヨハン・カスパーと、当市の市長の娘カタリーナ・エリーザベトであった。高校相当までの教育は家庭で受け、大学で初めて学校教育を受けた。詩人としての資質に反して、父の要望により同じ道へ進んだが、ライプツィヒ大学在学中に結核を患い、療養のため二年ほど学業を中断した。その後ストラスブルで修学を再開し、修士号証書の授与を受け、帰郷して弁護士の看板を掲げたのは二十三歳になったばかりであった。その翌年、四カ月ほどをヴェッツラルで法律実習に携わる間に、すでに婚約者のあるシャルロッテ・ブッフへの失恋を体験する。

この体験に基づいて、それから一年数箇月後の一七七四年の春、ゲーテは『若きヴェルターへの悩み』を書き上げ、これがライプツィヒの秋季メッセで発売されて一躍注目を浴び、渦中の人となった。すでにその師走には、パリへ向かう途上のザクセン・ヴァイマル公国の、間もなく母の後見から自立するカール・アウグスト公の求めによって謁見が行われ、命運が開けて行く。

ハールツ山地の盟主プロッケンはドイツ国内の低山であり、しかもその南部山麓に位置するザクセン・ヴァイマル公国のブレインとして招請されることになるのであるから、この山へのアプローチは除かれ、三度プロッケン登頂を果たした。しかし、これとは別に、遠出であり、困難と日数もかかるスイス紀行もまた三度敢行した。さらには、二回のイタリア紀行でも、伊・瑞国境の峠を往復しなければならなかった。一般的には自滅を招き勝ちであった、当時のシュトルム・ウント・ドラングの思潮の中で、ゲーテの登山は、先ず第一に純粹な自然体験として求められたものの、それは肉体的な要求ばかりでなく、精神的な自己陶冶の効果に関する評価が重要で、この面では詩や文学作品の創作に寄与したわけであるが、鉾山の探勝や岩石や植物や色彩についての自然科学的な研究としても当時の学会の水準を越えるレベルに達していた。

一、(第一次) スイス紀行

『若きヴェルターの悩み』の作者としてデビューした翌年の五月に突然降って湧いたスイス紀行の経緯とは。この旅についての資料は、自伝『詩と真実』<sup>①</sup>と、全部で六頁余りの日記である。<sup>②</sup>

クロプシュトゥックの崇拜者でゲッティンゲン大学で学び、この大学で刊行する詩集(一七七四年初め)への寄稿を通じて知り合ったシュトルベルク伯爵兄弟が、一七七五年五月中旬、スイス紀行の途中、フランクフルトのゲーテを訪問し、数日滞在した上、ゲーテを誘って、この旅への同行を求めたのであった。この勧誘は、このとき抱えていた問題解決の障碍になるといって悩むよりは、むしろそれを投げ打つ好機として歓迎されたのである。問題と

は、先ず弁護士業を含む日常的な「すべての仕事」の外に、婚約中の「リリーなしで済ませるかどうか」を試すことだった。資産家の息子としては生活のために働く必要があるわけではないから、弁護士業からは早晩足を洗うことになるであろうし、生き甲斐となっている研究と創作活動には決まった休日はないので、旅への勧誘があればリフレッシユの好機である。では、婚約はどうするのか。リリー・シエーネマンは同郷の銀行家の娘で、この年の初めに知り合い、早くも復活祭には婚約の運びとなったのである。しかし、リリーとともに社交界への出番が頻繁になったことは、ゲーテにとっては重荷であった。おまけに父は、スイスにとどまらず、是非イタリアまで足を伸ばすようにと激励する。内心は婚約解消を決意したが、暗示の手紙だけで済まして、旅支度に勤しんだ。

この兄弟のうち、弟のフリードリヒ・レーオポルトとの交友は、その後四十年以上に及んだが、この長旅はレーオポルトのイギリス人女性との関係を解消するための窮余の策であることが本人の告白によって明かされた。また、この兄弟の同行者として、同じゲッティンゲンの法科生ハウクヴィッツ伯爵がいた。

チューリヒに神学者であり骨相学者でもあるヨハン・カスパル・ラーヴァーターがいた。この人は世界中の人々を自分の骨相学の協力者かつ参加者にする心をかけていて、ゲーテもその人名録にすでに入っていたのである。ラーヴァーターとの交友は、ゲーテが二年前に自作のドラマ『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の初版本を出版社を通して献本したのを機に、文通が続いていた上、その一年後には素描家を伴ってゲーテを訪問し、肖像画を描き取った。ラーヴァーターは、このようにして重要な人物の肖像画を集めて骨相学の著書に活用した。この直後、ゲーテはラーヴァーターをバート・エムスへ案内し、また翌月には他の数人を交えてライン・ラインの船旅も共にした。

途中、様々な有名人や要人との出会いや交流、また各地の美術や文化財の見学のため約四週間かかってチューリヒに到着。チューリヒではラーヴァーター宅に一週間寄寓する。二人が精神的な関係を深めている間に、ここまでの旅の同行者は、ゲーテを見捨てて旅立った。彼らに代わって新しい道連れが名乗り出た。それはフランクフルトの有名なカルヴァン派の教徒の息子で、チューリヒで修行中のヤコブ・ルートヴィヒ・パッサヴァントである。このパッサヴァントの先導でスイスの山旅をすることになったが、これはゲーテにとって、以前からの憧れでもあった。

（山旅の出立は六月一五日で、チューリヒ湖（標高四〇六米）を南東のリヒタースヴィルへ向けて渡船し、船上で詩を詠む。

チューリヒ湖上にて

いまこそわれは腹一杯

天地の養分を吸い込む。

あたりは素晴らしい自然が取り巻き

われをその胸にかき抱く。

拍子をとってオールを漕げば

そのつど小船は波に乗る。

そして雲を纏った山々が  
われらの船出を出迎える。

わが目よ、なんだってお前は伏せるのだ。

金色の夢よ、また騙す気か。

去れ、夢よ、いかに華麗なれど。

こちらにも、愛と生気があるのだ。

波の上に漂うは

きらめく無数の星よ。

愛すべき薄霧が

ぐるりと遠方に聳える山並みにかかる。

朝風が翼を付けたように

日陰になった入り江を飛び回る。

そして湖面は

熟した果実の鏡となる。

初日のこの日はアルプ谷のマリーア・アインジーデルン（標高九〇〇m）まで入る。途中、多数の巡礼者が彼ら

二人を追い抜いて行った。ここには九世紀に創建され、一〇世紀中葉にローマ皇帝かつドイツ国王であるオットー一世が帝国直属のものに昇格させたベネディクト派の大修道院があり、一八世紀に改築された現存のものは、バロック様式の代表的な建築物である。ゲーテ等は建物の内部を案内人に誘導されて見学した。

一六日。「完全な孤独と荒涼たる」岩肌の荒れた峠越えを初体験する。雪に覆われた深い縦の樹林帯に挟まれた谷を通ってシュヴァイツ（行程約二七km）に夜一〇時到着。途中、ミーテン山の双耳峰（標高一八九九と一八一二m）が印象的だった。

一七日。前夜就寝が遅かったため、午後一時出発でリギ山（標高一七九七m）へ向かう。ラウエルツ湖の船頭は二人のメイドだった。渡船中、二時に高いけれども素晴らしい陽射しが出現したので、恍惚として見惚れた。朝五時に修道院の礼拝堂を過ぎ、山荘「ツムオクセン」泊り。

一八日。早朝、オクセン（山荘）から礼拝堂をスケッチする。一二時に冷泉での水浴の後、三時前に周囲を浮雲と霧に取り巻かれた頂上（標高一七九七m）に立つ。「森羅万象の素晴らしさ」。八時にオクセンへ帰着。戸口で魚のフライと卵焼きと十分なワインで元氣回復。「（修道院の）鐘の響き、滝の落水、泉の水音、フレンチホルン」。

一九日。六時半に発ち、フィアヴァルトシュテッター湖（水面の標高四三四m）のヴィツナウに下る。昼頃、ゲルザウ、三時にフリユエレン、四時にアルトドルフ着。この湖のリュットゥリからアルトドルフまではヴィルヘルム・テル伝説に纏わる土地で、ゲーテも湖上から注視したのであるが、特にアルトドルフは、ハープスブルクの代官ゲスラーによってテルが息子の頭に載せたりんごを射落とすよう強要された縁の場所だった。

二〇日。六時半に棧橋へ行って、魚のフライを賞味し、雪解け水で行水する。三時出発。七時半にヴァッセン着

(標高約九〇〇m)。

二一日。六時半出発。上り坂。次第に恐ろしくなる。ゲシェーネン(標高約一一〇〇m)通過。スケッチする。アンデルマツト(アルトドルフから二五km、標高約一四四〇m)で上等のチーズ。快調。

二二日。三時半に宿屋を出る。平坦なウアゼレン谷から、南から流入するゴットハルトロイスに入ると、雲が厚くなって風雪模様となり、足元は岩と苔で滑りやすく、滝の水音や荷馬の鈴の音。「死の谷のように荒涼としている——一面に骨を播いたようだ 霧の海」。途中、巨大な滝の景観に瞠目する。谷の「この一帯で最も素晴らしい瀑布の一つ」。やがて、ザンクト・ゴットハルト峠東脇に群れを成している小湖に到達し、その間にあるホスピッツ(標高二〇八m)の山荘に迎えられる。この峠はイタリアとドイツ間の交易の要衝だということを聞かされる。

二三日。「イタリアへの国境からの眺望」をスケッチしたが、素人芸で思い通りにはならなかったものの、この「無駄な努力のお蔭で」近くの山の光景が鮮やかに記憶された。案内役のパスサヴァントは、しきりにイタリア側へ旅を進めることを提言し、説得にかかったが、ゲーテはそんな藪から棒な話には乗るわけにいかないと断わった。『詩と真実』には次の説明がある。

「ロンバルディアとイタリアは全く馴染み難いものに思われた。ドイツは周知のもの、愛すべきもの、地元の馴れ親しんだ風景だった。率直に言えば、わたしを長いあいだ丸ごと抱きかかえ、わたしの生活を支えてきたものは、今もなおなくてはならぬ要素であって、とうていその境界の外へ踏み出すわけにはいかなかった。」

この旅立ちの前に、父親からイタリアまで足を伸ばすように勧められていたにもかかわらず、ゲーテの心中には、まだイタリア紀行への動機付けが不足していたのであろう。諦めきれないパスサヴァントを従えて帰路に着い



た。

二六日。チューリヒに帰着。

七月六日。チューリヒを発ち、二二日にフランクフルトに帰宅。途中、シュトラスブルに立ち寄るが、ここでラーヴァーターの骨相学の共同研究者である医師J・G・ツインマーマンに出会い、シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人の影絵を見せられて深い感銘を受けたことは、後のヴァイマルでの彼女との出会いを占う前触れとなった。

### 二一イ、(第一次)ブロッケン登山

ゲーテは二六歳になった一七七五年の秋にザクセン・ヴァイマル公カール・アウグストの招聘に応じて、一月初旬にヴァイマルへ身を移した。この領域は一五七二年以来、公国の地位にあった。この宮廷で、この小稿の情報源として特に重要なのは男爵である馬寮長官の妻シャルロッテ・フォン・シュタイン宛のゲーテの手紙である。

宮廷入りをしてわずか二箇月にしかならない一月初旬の最初の手紙でゲーテは愛を仄めかしている。その後、ゲーテは旅先からも彼女へまめに近況を伝えた。

宮廷生活が二年余りとなった一七七七年一二月にハールツ山地へ一人旅を敢行した。この半年前に、その復興が期待されている、テューリンゲンの森にあるイルメナウ鉱山を視察して、芽生え高まった地質や鉱物に対する関心が動機となったのであろう。ちょうど、農民の要望でアイゼナハ地区での猪狩の行事が予定されていたが、回り道

をした後にこれに参加する旨の許可を得た上での行動であった。シュタイン夫人（以下S夫人）宛には一月二九日付けで、間もなく旅立つ旨の予告から、翌月九日までにほぼ隔日のペースで報告<sup>③</sup>している以外に、一日から九日までと、一〇日から一五日までの経過を日記状に略記したメモ<sup>④</sup>も送っている。この二種類の報告の外に自伝『詩と真実』に回顧録<sup>⑤</sup>があるので、これらの資料からハールツ紀行の経過を辿ってみよう。一月末日にヴァイマル（標高約二八〇m）を出発し、キスホイザーを経てノルトハウゼンまで、「黄金色に染まった草原」の騎行を楽しむ。

一日、朝七時、運搬人を雇ってイルフェルトを発ち、昼頃エルビンゲローデ（標高約四〇〇m）着。「山道と岩」に囲まれて、すでに「ハールツ山域に入った」ことが実感される。この午後と翌日は一日中、この地域にある二つの鍾乳洞のうち、バウマンズヘーレを探索する。「自然ほど怪奇なもの、自然ほど偉大なものはない」と、歓喜に浸りながら自然の風物をスケッチして一日を過ごした。

三日にヴェアニゲローデへ前進。この宿屋の給仕に話し相手として紹介された神学者プレッシングを訪ねて一晩の団欒をもつ。プレッシングは、その前年にゲーテのもとへ分厚い手紙を送ってきた、ファンの一人であることが分かった。

四日。イルゼンブルクを経てゴスラーへ。ここで雪、雹、雨と入れ替わる嵐に見舞われた。

五日と六日はほとんど無為のうちに過ごし、「全く何も生み出さない数時間」を経験したことは「自ら理解しがたい」ほどであった。

七日。早朝、ホームシックにかかる。クラウスタールへ出発、到着。

八日。二つの鉾山に入坑し、視察中、小落石があり、擦り傷を負う。晩になって、ブロッケン山直下の登山口ア

ルテナウに移動。

九日。アルテナウからブロッケン（標高一四二m）登頂。下山して、途中にある営林署の小屋・トアフハウス（標高八〇〇m）に宿泊した。トアフハウスの林務官には、夏季には何度も登頂したが、「冬場にそんな気を起こすのはいかにも軽率だ」と戒められた。あたりは霧に包まれて何も見えなかった。林務官は、頂上も同様で、三歩先も見えないだろうという。しかし、しばらくすると霧が晴れてブロッケンの全容が姿を現した。ゲーテの熱意に絆されて林務官も気を変えて同行に応じた。「一〇時一五分ブロッケン登頂。頂上に三時間留まる。素晴らしい快晴。周囲はすべて霧と雲に包まれている。上はどこまでも晴れ渡っている」。四時帰着。トアフハウスの林務官の宿泊所に一夜を借りる。

一〇日。トアフハウスで書かれたシュタイン夫人への手紙によると、この山域に入って以来出会った誰からも、登頂は「出来っこない、無理だ」と、相手にしてもらえなかった。

今だから「あなた（S夫人）に打ち明けますが（誰にも口外しないでください）、わたしの旅の目的は、ハールツで、ブロッケンに登頂することが念願だったのです」。鉱業や林業のような職業上の理由で入山するのは例外として、酔狂で冬期登山をすることは、まだまだもな人間の行為とは認められていなかった。したがって、ゲーテは「回り道」という婉曲な言い方で猪狩りへの合流の遅れに対する言い訳としたのであった。

一日。トアフハウスからクラウスタールまで。ここで英気を養い、下山の準備をする。

一二日。六時半、霧の中を出発。この日はほとんど徒歩でダムハウスを経て、ザンクト・アンドレアスベルク（標高六三〇〜八〇〇mに跨る山岳都市）に着く。市庁舎に立ち寄る。夕方、ザムゾン銀山に入坑。

一三日。ラウターベルク、ジルケローデを経てドゥーダーシユタットへ。ラウターベルクで馬に飼葉を与える間、小高い場所で、あたりを見晴らしていると、左目に異物が入る。ドゥーダーシユタットに着いてから、眼帯を余儀なくされ、「退屈の余り」早寝をした。

一四日。前日に続き、深い霧と泥濘に悩まされつつミュールハウゼンへ。

一五日。郵便馬車でアイゼナハへ。ここでカール・アウグスト公に出会う。

## 二―ロ、冬のハールツ紀行

### 冬のハールツ紀行

重い朝雲の上で

獲物を求め

心地よく翼を広げて漂う

秃鷹のように

わが歌よ、高く舞ってくれ。

なぜなら神は

幸せな者が喜ばしい

目標に向かってすばやく

進めるように

万人に辿るべき道を

示したのだから。

だが、不幸のために

心が縮こまっている者は

鋭利な鋏でしか切り離せない

鉄線の格子にも空しく逆らう。

茂みの陰に野鳥は隠れ込み

アオサギは<sup>(6)</sup>とつくに

大葦切とともに

沼地へ下ってしまった。

王侯の進軍の後方で

改修された道を辿る

気楽なお供のように、  
フォルトナが引いてくれる  
車の後に付いて行くのは  
たやすい。

だが、道を逸れたらどうなるか。

小道は藪の中へ消えて行く。

掻き分けた背後では

跳ね返った灌木が激しくぶつかり合う。

足元の草は跳ね起き、

伸び放題の草木が体に絡みつく。

だが、溢れんばかりの愛から

人間嫌いを味わった後、

バルサムが毒になった者の

痛みを癒せるのは誰か。

先ず侮られ、今は侮る者なれば、

我欲のせいで知らぬ間に  
独自の価値をすり減らす。

愛の父よ、汝のプサルターの音が

彼の耳に届いたならば

彼の心を元氣付けてやれ。

荒野の中で

渇き苦しむ者の近くにも

数ある泉が見えるよう

目の曇りを取り給え。

すべての者に

歓喜の数々を惜しみなく

もたらず、汝、神の分身よ

若者らしい勢いと

殺意に燃えて

獣の足跡を追う

獵友たちを祝福し給え。

農夫らがすでに永年

棍棒を使っても防ぎ切れなかった

災いに対する遅れ馳せの復讐者なれば。

だが、孤独な者を

汝の黄金色の雲にくるまい給え。

おー、愛よ、薔薇がまた咲き出すまで

汝の詩人のしっとりした髪の毛を

一葉草で囲んで守り給え。

夜の浅瀬を渡り

荒れた広野の山道を辿る

詩人の足元を

たそがれどきには松明で照らす。

朝には多彩な光を射して

彼の心に微笑みかける。



鷹狩りのような勢いで

汝は彼を運び上げる。

冬の激流が岩から跳ねて

彼の詩の中に跳び込む。

そして予感を覚えた民族が

精霊を並べて飾っておいた

恐れられた山頂の

雪を被った天辺が

心のこもった感謝の祭壇となる。

秘密めかしながら公然と

究明されない胸のうちを抱えて

驚いて目を見張る世界の真上に立って

雲上から見下ろすは

汝と肩を並べる兄弟たる山々の水脈のお蔭で

諸国と壮麗さ。

### 三、(第二・三次) ブロツケン登山

一七八三年九月六日から一箇月かけて、S夫人の息子フリッツとともにハールツ紀行に出た。この年の日記は残されていないので、旅の経過はS夫人への手紙が情報源となる。

また、翌年九月一日から一六日まで第三次ハールツ紀行を行ったが、この年も日記はなく、S夫人への二通とヘルダーへの一通の手紙だけが情報源である。従って情報不足もあるのみならず、主として紙幅の都合上、この二度の登山の回顧を省略する。

### 四、『ファウスト』の成立

ファウスト伝説は一四八〇年に生まれ、六〇歳未滿で死んだ本名はゲオルク・ファウスト、伝説上はヨハン・ファウストにまつわるもので、一五八七年にフランクフルトの印刷屋ヨハン・シュピースによって出版された民衆本が原本で、これがイギリスに渡り、劇作家クリストファー・マーロウによって加工、脚色されて、素材の巨人主義の面が強調された。イギリスで成長したファウストが一七世紀にドイツへ舞い戻った。少年時代のゲーテは人形劇として『ファウスト』を初体験した。ファウスト本人は奇術の道具を携え、占星術師として出没し、一五一三年からしばらくはヴァイマル公国のエアフルトでも活動したという。このような経緯から『ファウスト』がゲーテに

とって身近なものに感じられ、強く引き付けられた事情は納得される。

ブロックスベルク（ブロック山）という名の山はいくつかあり、ブロッケンもその一つ。伝説上、ブロック山は魔的なものの滞在地であり、魔女の集合場所だとされている。彼女たちは聖女ヴァルブルガの祝日である五月一日の前夜、すなわちヴァルブルギスの夜、または一年の別の変わり目にそこで悪魔と氣勢を上げる慣わしである。ブロック山をめぐる伝説が一冊の本に纏められたのは一六六九年のことである。ゲーテは、一七七五年にヴァイマルへ招聘されたとき、すでに彼の『ファウスト』の草案の一部を携えてきた。この草案自体は失われたものの、ゲーテの死後五〇年以上を経て、これの写本が一宮廷女官の遺留品から発見された（『ウァファウスト』…『初稿ファウスト』）。ゲーテはその後、死の直前まで修正、加筆を続けた。ヴァルブルギスの夜の場面は一七九五年から一八〇五年の間に書き上げられたのであるが、一八〇一年二月にゲーテがヴァイマルの図書館からファウストと魔的なものに関する数冊の書物を借り出した記録が遺されている。

##### 五、（第二次）スイス紀行

ゲーテはヴァイマル宮廷に入ってから半年後に、枢密公使館参事官という地位を委嘱されていたが、一七七九年八月には枢密顧問官に昇格した。この直後の九月から翌年一月中旬までの四箇月をかけて、今度はカール・アウグスト公の侍従の一人として長期のスイス紀行の途についた。旅の目的は定石どおり日常生活からの解放と慰安であり、表向きは主従関係の延長であったが、旅を立案し、勧誘したのはゲーテの方だった。夫人と性格の不一致に悩

む大公を救済しようというゲーテの年長者としての心遣いが働いたようだ。ゲーテ自身にとっても、スイスには第二の故郷としての郷愁が強まっていた。日記には、「旅立ち」として、九月は一二日から一六日にヴァーベルンを通過した後、記述は途絶えている。日記よりも手紙の<sup>9</sup>方に情報量が多い。手紙の編集は、全集の版によって異なるが、ここでは二種の版を対象とする。

今回は前回のコースと違って、チューリヒには寄らず、バーゼル―ビール―ベルンから先ずベルナーアルペンのトレッキングを最初に選んでいる。

九月二四日。ライン川をシュパイアーへ渡す船を待つ間にS夫人に一筆認めた。

九月二五日。ラインツァーベルンにて。日記を付けようと思ったがうまくいかないので、その代わりに、「毎日出来事を簡単に書きつけてあなたに送りたい」と書いた。

九月二六日。シュトラスプール。結婚して姓がフォン・トウルクハイムに替わったリリーを訪問。

九月二七日。ライン川を渡り返してエメディングンへ。

フライブルク、バーゼルを経てビールへ至る峠(標高八二七m)越えルートの途中ミュンスタ(ムティエ)から、一〇月三日に、「すでにローマ人が拡幅して通りやすくなった」その山道の情景をS夫人に書き送った。

一〇月五日。ビールから外輪船で、ルソーが宗教観の問題で一時ジュネーヴから追われて逃れ住んだ聖ペーター島を訪れた。

一〇月六日。ビールから湖岸に沿ってエアラッハへ行き、そこからネシャテル湖岸のソージュへ行きたかったが、道に迷ったので諦めてアンネに泊まった。

一〇月七日。湿原では足が埋まりそうになって往生した。馬を下りて引かねばならない場面もあった。ムアテンを経てベルンに着いた。

一〇月の日記は八日の「トゥーンまで」から開始される。また、八日にはラヴァーターに宛てて、「ベルン、ローザンヌ、ジュネーヴ、ルツェルンなどの知人」の紹介を依頼している。

九日。トゥーン湖をウンターゼーエンへ船で渡った。ここからしばらくは格子柵車に詰め込まれた後は徒歩でラウターブルネンに着いた。「ユングフラウのホルンが雲を纏っていた。陽射しを浴びた雪の谷間が格別美しい。」そして、「チンゲル氷河」への眺望がある場所というと、白リユツチネ谷のラウターブルネン付近の位置であろう。チンゲルホルン（標高三五七七m）はアイガー・メンヒューングフラウと西南へ続く山稜上にあつて、ヴァイセ（白）ルツチネ谷の最奥に位置している。S夫人に宛てて、「好天の下で水しぶきを上げて流れる谷川を初めて目にした喜び」を伝えている。

一〇日。谷を遡行する。左にメンヒを見て、九時半に「ユングフラウが姿を見せた」。後方にミュレンやギメル  
の森が見えた。一一時半にブライトホルン（標高三七八二m）が見え、さらに高原牧場とチンゲル氷河を横切った。  
一一時半からチンゲル氷河に沿って登り、「急傾斜で落ち込んでくるシユマドリバッハ」を見た。ウンターシユタ  
インアルプで昼食をとる。一時半にチンゲル氷河上に立った。三時一五分前に「岩と氷河の間にあるオーバーホル  
ン（標高約二〇五〇m）に到達。陽が射してきた。∴堆積する岩石の間に氷混じりの水が小湖（オーバーホルンゼー）  
を成していた」。三時に下山開始。雲と雨。

一一日。ラウターブルネン（標高約八〇〇m）を発ち、二時にグリンデルヴァルト（標高一〇五〇m）着。朝のうち

は雨だったが、その後、天気は好転した。

一二日。七時前に出発し、一二時にグローセ(大)シャイデク(標高一九一六m)登頂。それからシユヴァルトヴァルトまで足を運んだ。昼は或る小屋の脇で休んだが、そこは「ヴェルホルン(標高三九二m)とエンゲルホルンの真下で、それらのホルンは櫛状に尖塔が立ち並ぶ全く怪異な」ものだった。一時に下山開始。

これでベルナーアルペンのメモは終わっている。この後、一日はトゥーン泊り、ベルンには一九日まで滞在。

二〇日はバイルン、二一日はムドン、二二日から翌日までローザンヌに滞在。二四日は案内人を伴い、西方のジュラ山脈方面へ馬に乗って向かう。しばらく登ると、湖上への景観が開けた。特に「ヴァリス山塊やフォシニエ山群の彼方に聳えるモンブラン」の勇姿に目を見張った。ローザンヌから標高差一〇〇〇mほどの峠(コル・デュ・マルシェリュ)を越えて、五〇〇m下るとジュー湖(湖面の標高一〇〇五m)の西南端の近くに着く。案内人がいたお蔭で、よそ者は泊めないことになっている宿で一夜を凌ぐことができた。二五日はジュー湖の西岸に沿って北東へたどり、ダン・デュ・ヴォーリヨン(標高一四八三m)に登り、再びモンブラン、ヴァリザールペン、ベルナーアルペンなどの遠望を楽しんだ。ヴァレ・ド・ジューに宿泊。二六日の出立に際し、帰路の道順の選択に当たり、ジュラ山脈の最高峰ラ・ドール(標高一六七七m)は遠くないと聞いて、一同これを遣り残すまいと決心した。ジュー湖に流入するオルブ川に沿って遡上するとレルセで新しい街道に出た。これを北に辿ればパリに至る。少し下ったところで、ヴェーデルに馬をサンセルジェまで下ろしておくように依頼してドールの頂上を目指した。最高峰に立つて、三六〇度の展望を恣にした。「この眺望の大きさと美しさは筆舌に尽くし難い」。サンセルジェで待たせておいた馬に跨って月下の山道をニヨンに下った。二七日から一月二日までジュネーヴ(標高三七五m)に滞在。三日

に公爵と獵師一人とともに幌付四輪馬車でクリューズに至った。翌日は驟馬に荷を託して徒歩で、サランシエで昼休みをとってシャモニ（標高一〇三七m）まで。六日にシャモニを發ちマルティニへ移動。普通ならば北へ迂回するモンテ峠（標高一四六一m）を越えるべきところ、ガイドの勧めに応じて困難なバルム峠（標高三二〇四m）越えを決意。この標高はゲートが立った二番目の高点（最高点はフルカ峠）であるから、マルティニに着いた晩にS夫人に宛てた手紙の一部をここに訳出しておく。

「ヴァリス・マルティニにて 一二月六日晚

われわれは幸いにもこちらへ越えてきました。こうしてこの冒険にも打ち勝ったといえるでしょう。幸運に恵まれたという喜びに任せてもう半時ほど筆を運ばせませす。

駄馬に荷を積んで朝九時頃にプリーエーレ（シャモニの中心部）を發ちました。雲が行き交っていますので、山々の頂が現れたと思う間にまた隠れ、陽が谷間へ条状に射し込むかと思えばまたあたり一帯が雲に覆われました。われわれは凍った谷の流れの際に沿って遡行しました。最高峰エグイユ・ダルジャンティエール（標高三九〇一mからアルヴ谷源流へ流下）の水河（の末端）を登ることになったのです。山の天辺は雲に覆われていました。（分岐路のあたりで（一般的な）ヴァロルシーヌ越え（標高二二六一m）の道を捨て、取って替るバルム峠越えの道をとるのかどうかについて相談がありました。どう見ても手強そうでしたが、ここで得られる物は多くても、失う物はありませんでしたので、一寸先も霧と雲とで闇も同然の領域へ果敢に踏み込みました。水河末端のツアアあたりに来たとき、雲が千切れて全体に陽を浴びた美しい水河が姿を現したのです。われわれは腰を下ろしてグラス一杯のワインを飲み干し、お八つを少々口にしました。いよいよアルヴ川の源流に向かって草茫々の荒地を登って行くと、霧の世界へ

次第に近付き、ついにわれわれは完全に呑み込まれてしまいました。しばらく我慢して登り続けていますと、また突然頭上が見えなくなり始めたので思わず歓声が出ました。間もなくわれわれは幽閉を解かれると、雲は重そうに足下の谷に沈んでいるのが見えました。雲に隠れているモンブラン以外の、左右を取り巻く山々を指呼の間に望むことができませんでした。いくつかの氷河は天辺から雲に隠れた裾まで落ち込んでいる状態が見えましたが、中心部が突き出た岩稜の陰になって見えないものもありました。谷の南端以外では、広大な床状に広がる雲のあなたに陽を浴びた遠い山々が望めました。個々のものにせよ、全体像にせよ、あなたの心に届くわけもない山頂とか尖峰とかの名を一々挙げてても何の意味があるでしょう。もつとも、おかしなことには、われわれの足下では大気の精霊たちが競い合っているような感じですか。しばし立ち止まって広大な眺望に見とれていると、霧が急に沸騰したようになって、吹き上がり、改めてわれわれを包み込みそうになりました。山の方へ逃れるしかないと思い、馬力をかけて登りかけましたが、いとも簡単に追い越されて呑み込まれてしまいました。それでも威勢を張って上へ上へと登り続けていくと、二つのピークを繋いでいる鞍部を吹き抜けてきた山からの向かい風が助け舟となり、霧を谷間へ追い返してくれたのです。このような奇妙な争いが何度か繰り返されているうちに、われわれは幸運にもとうとうバルム峠に登り着いたのです。そこは一風変わった独特な眺めでした。山の峰々の上にあるはずの高い空は覆れていましたが、われわれの足下にあるシャモニの谷全体がいくつか千切れた霧の隙間から見え、二層に分かれた雲の間に山々の頂上が見えませんでした。われわれの東側は険しい山並みによって取り囲まれ、西側には不気味な谷が見下ろせますが、ところどころの草原には人家もありました。われわれの前方にはヴァリスの谷があり、一目でマルティニまで見下ろせました。地平線に向かって次第に増加し、積み重なっていくように見える山並みに四方を開



まれて、われわれはサヴォアとヴァリスとの州境に立っていたのです。すると、数人の密輸業者が駄馬を引いて山を登ってきて、われわれを見てぎょっとしました。彼らはそんな場所で誰かに出会おうとは想像してもいなかったからです。《実弾が入っているんだぞ》と言わんばかりに、一発ぶつ放しました。われわれの素性を探ろうと、一人が前へ出てきました。その男はわれわれのガイドと顔見知りで、われわれが警戒の要らない集団だと分かると、他の者たちも近付いてきて、互いに道中ご無事でという言葉を交し合って分かれました。…」

ここからトゥリアン氷河の末端まで高さ一〇〇〇mほど急降下し、そのまま谷沿いに「かなり厄介な道」を辿り、晩の六時ごろマルティニに到着した。

この後、S夫人宛には二四日付けチューリヒからの手紙まで空白がある。また、その他でも一六日付けルツェルンからのヨハナ・シユロツサー宛のものが最初である。従って、この先の行程については、以下のメモが唯一の情報源である。

八日から一三日までが一月のメモである。

八日。マルティニ（標高四七二m）を昼前に出発。楽しい道を三時間歩き、壊れた橋でローヌ川を左（右岸）へ渡った。古い宮殿からシヨン（標高五〇八m）方面への谷全景への素晴らしい眺め。シヨンを経てシエール（標高五三三m）へ。「シエールの手前で多様な形の高山植物」。

九日。シエールは、ベルナーアルペンアイガーから西南に伸びる山稜（ペーターズグラート）の末端に当たっており、その山稜の鞍部レツチェンパス（標高二六九〇m）から流下するデーラ谷の途中にあるロイカーバート（標高一四〇一m）を見学するために、ここで一日をとった。公爵と二人だけでシエールからヴァリス谷を八kmほど先の

ロイクからデーラ谷に入る。ロイクからロイカーバートまでは直線距離でも一〇kmはある上、「岩の悪路」でシエールからは九〇〇mの標高差がある。しかし、途中のインデンやヴァリス谷への眺めは格別だった。ロイカーバートのさらに先にグミパス（標高二三二六m）があり、この方向へも登高を試みた後、バートへ戻って宿泊した。

一〇日。最初の降雪。夜明けとともに出発。インデンを経てロイクへ。ここでヴェーデルは馬を返しに戻ったので、ゲートと公爵は駄馬に荷車を引かせてブリークへ向かう。ブリークでは暖炉付のよい部屋。

一日。ブリークからは馬上に。谷は狭まり、傾斜は増す。昨夜のうちに山には雪が降った。次第に雪の世界へ入って行く。午後は東風（向かい風）となり、強い寒気。フルカ（峠）には至らず、道半ばのミュンスター（標高二三九〇m。谷は一三一九m）止まり。

二日。夜中に起きて窓越しに外を見ると、雪は降っておらず、晴れていてオリオン座が見えた。七時にオーバーヴァルト（標高一三六八m）に向け出発。雪は深くなり、風は強まる。オーバーヴァルトでフルカ越えの案内人を頼むと、「馬のように頑丈な二人の若者が申し出た」。一〇時出発。最初の谷沿いの登りはきつさを増すものの、日が射して（北東からの）ロース氷河の大規模な眺め。二時間目の登りは雪が多い割にはまずまずだった。しかし、三時間目になると胸突き八丁の傾斜となり、息切れに耐えねばならなかった。フルカ峠（標高二四三二m）では雲が行き交い、吹雪模様で太陽は月のように青白く、不毛な谷間は灰色で、ラップランドのような風景だった。下りになると、積雪はずつと深くなった。夕方五時にレアルプ（標高一五三八m）着。カプチン会修道院で歓待される。

一三日。準備万端整えて、一〇時ごろ出発。ウアゼラー（フルカロイス）谷を下り、南へゴットハルトロイスに沿ってザンクト・ゴットハルト峠には二時ごろ到着。この峠に立つのは四年前の一七七五年に次いで二度目である

が、「今度もイタリアへ行く気にはなりません」とS夫人宛に断言している。

## 六、ヴェスヴィオ及びカルコノシエ登山

ゲーテはすでにイタリアとの国境ゴットハルト峠に立ちながら、一歩たりとも踏み込む気にはならなかったことはすでに確認した通りであるが、三七歳となった一七八六年九月にようやくイタリア旅行を企て、同月八日にブレーナ峠を越えた。この三年前とその翌年のいずれも九月に近郊のプロッケン登山はしたもの、充分な期間をかけた保養からは遠ざかっていた。精神的にはともあれ、肉体的には中年に差し掛かって、人並みに胃腸障害のみならずリユーマチにも悩まされるようになり、療養が模索された。夏に初めてボヘミアの有名なカールスバートの保養客となった。それ以来、一八二三年までほとんど毎年この保養地を訪れ、通算の滞在日数は一一一日になるという。初回の一七八五年にはS夫人やヘルダー夫妻もここを訪れた。翌年も大公を初めS夫人とヘルダー夫妻も保養客になっていた。すでに八月一日には帰路に就いたS夫人をサクセンとの国境のシュネーベルクまで見送ったが、イタリア紀行については予告せず、一〇日ほど後に手紙で暗示したのであった。八月二八日に保養地を發った大公に対しても同様の対応を取った。上記S夫人宛の手紙には、「自由な世界であなたと共に生き、名利と無縁な、人里離れた気苦労のいらぬ境地で、真の生みの親である母なる大地のそばへ近寄ります」と、認めた。イタリアの主な滞在地はヴェネツィア、ローマ（通算一年三箇月）、ナーポリ（通算二箇月弱）、シチーリア（約四〇日）などである。帰途はミラノからコモを経て、一七八八年五月三〇日にシュプリューゲンパスを越えた。第一次ローマ

滞在の後、一七八七年三月にヴェスヴィオ火山に三度登頂した。この火山には、父ヨハン・カスパーも修学期の最後に登山して教養に花を添えた。

ヴェスヴィオ登山については『イタリア紀行<sup>①</sup>』の改まった記述の外に残された直接の資料は多くない。三月三日の自分の秘書サイデルに宛てた二行足らずの手紙には、「幸いここに着いて、ヴェスヴィオにもすでに登った<sup>②</sup>」<sup>②</sup>としか記されておらず、一〇日のS夫人の息子フリッツ宛では、「二日と前日にも登ったヴェスヴィオについて一言も触れず、「わたしは、しばしば海辺にいます。数日来、海は大荒れです」と、あらぬ方向へ話しを逸らしている。しかし、「わたしの外国滞在について悲しい想像はしないでね。わたしがまた沢山の知識と新しい概念を自分のものにするには是非とも必要だったのです。しばらくは、それらのまだ生の素材を自分なりに消化することになります。そのことはわたしばかりでなく、わたしの近しい人達にも役立つことになるでしょう」。このような一般論に終始して、特定の話題には触れていない。そこで日記に目を転じると、三月一九日の日付で、「ヴェスヴィオについての応急の所見」がある。しかし、ヴェスヴィオには三回登っていて、『イタリア紀行』の観察が、新たな噴火を対象としているのに対し、日記の記述は特定日のものとは限らないため、両方の観察を併記することは避けて、『イタリア紀行』の方だけの引用に止める。

ヴェスヴィオはヨーロッパ大陸では唯一の活火山であって、二十世紀に入っても二度の爆発があり、そのたびに標高が変わるので確定的ではないが、最新の資料では一二八一mとなっている。溶岩と凝灰岩からなる成層火山である。

「オッタジャノへ流下しているので、ナポリ方面には見えない溶岩がたったいま噴出を始めたという情報に、三

度目にヴェスヴィオ探勝を支度中だっただけにわたしは興奮した。二輪の一頭立て馬車を飛ばして山麓に着いた途端に、前回われわれを山上へ案内してくれたあの二人のガイドが現れた。

頂上に着くと、一人はコートと食料品の番をし、若い方がわたしに付いてきた。巨大な蒸気を勇んで目指した。それは山の円錐形の火口の底から噴出していた。われわれは火口の縁へそぞろ歩きで下り、晴れた空の下、ついにもうもうと吹き上がる蒸気の間溶岩が噴出する有様を見た。

百聞は一見に如かず。溶岩流の幅は狭かった。恐らく三m以上ではなかったであろう。しかし、それが穏やかな、かなり平らな地面を流れ下る様子は十分に眩目に値した。なぜなら、溶岩流は流れ続けているうちに、表面と側面が冷却する結果、暗渠が形成され、その嵩は次第に増してくる。なぜなら、溶け込んでいる物質が灼熱した流れの下でも凝固して、流れは表面に浮いている残滓を左右同形に沈めて押し付けるからである。その結果、嵩が増して堤防状になり、そこを灼熱した溶岩が水車用の小川のように静かに流れるのである。……」

三月二九日からシチーリア島へ船旅。四月二日にパレルモ着。島を五月十一日にメッシーナから離れるまでの間に、カタニアからエトナ山（標高三三三三m）の西の一角、ロツソ山（標高一八七六m）への登高を試みたが、強風に阻まれて撤退を余儀なくされた。

「…前景には溶岩の堆積が、左手にはロツソ山の双耳峰が、われわれの真上にはニコロシの大きな森があつて、それらの上方に冠雪した、かすかに煙を噴き上げる山頂が聳え立っていた。われわれは赤茶けた山を目掛けて頑張った。わたしは一步一步登った。ロツソ山は火山性の赤茶けた砂礫と灰と岩の堆積だった。もし東からの嵐のよ

うな強風に足元を掬われそうにならなければ、火口の周りを快適に一巡できたであろう。数歩でも前進したければ、外套を脱がねばならなかった。しかしそれでも帽子が、その後からわたしが風に煽られて火口へ吹き飛ばされそうになった。わたしは落ちていてあたりの様子をじっくり見渡そうと腰を下ろしてみたが、この姿勢も無駄だった。真東からの強風が……」

ゲートルがイタリアからシュプリーゲンパス（標高二一三m）を越えてスイスまで戻るのは、一七八八年五月三〇日のことであるが、『イタリア紀行』は同年四月のローマ滞在の報告で終わっており、日記は一七八七年六月以降八九年末まで記載がなく、手紙も五月二十四日クネーベル宛から六月五日頃のヘルダー宛までは空白で、峠越えについての報告は見当たらない。

ゲートルは六月一八日にヴァイマルへ帰着したが、それから一三箇月も経たないうちにフランス革命が勃発した。ゲートルはぎりぎりのところで変貌前のイタリアを体験したことになるであろう。

一七九〇年三月に、ローマ滞在中のヴァイマル公母アンナ・アマリアからの出迎え要請を受けて、ヴェネツィアまでであるが、第二次イタリア紀行をした際、インスブルックへのルートとして、第一次のときのシャルニッツァー・クラウゼ（標高九五七m）とは異なるフェアンパス（標高二〇九m）越えを選んだ旺盛な好奇心を看過することはできない。この紀行については日程表とイタリアでの美術鑑賞記録が遺されている。

しかし、三月三十一日にヴェネツィアに着いたゲートルは、早速イタリアに対する幻滅をヴァイマル公への書中で洩

らしている。

「イタリアへのわたしの愛はこの旅によって致命的な打撃を受けることになるでしょう。」

さらに、ヘルダーには、

「ここにわたしの暮らしぶりの証拠となるような一葉の格言詩をお送りします」と書いて送った「ヴェネツィアの格言詩」の一節は以下の通りである。

これが、かつて去ったイタリアとは、

いまも道は埃っぽく、よそ者はどのみち騙される。

ならば気ままに振舞おう。

ドイツの誠実さなんてどこを探そうと無駄だ。

ここには生活の賑わいがあっても、秩序と規律はない。

誰も彼も見栄坊で、疑い深く、わが事にのみかまける。

そして国の達人たちも同じくわが身のみを労わる。

国土は美しきかな。しかし、嗚呼、ファウスティーネにはもう会えない。

これはもはや、心を痛めながら去ったイタリアではない。

この一七九〇年はフランス革命が勃発した翌年であり、その旧体制の崩壊と治安の乱れは隣国イタリアへも波及

していたことは否めず、この影響をゲーテの幻滅にも読み取るべきであろう。

第二次イタリア紀行から六月一八日にヴァイマルへ帰郷したゲーテは、翌月二十六日から一〇月六日まで、プロイセンの軍事演習に参加するヴァイマル公に随行してシュレージエンへ出張した。ドレーズデンを経て八月は主にブレスラウに滞在し、九月下旬に鉦山視察を目的にリーゼン山塊に入り、一二日にシュネーコッペ（標高一六〇三m）へ登った。

しかし、山域の地形や登路についての言及はなく、遺されているのは、シュネーコッペのリンドウの植生についてのみである。

## 七、（第三次）イタリア ⇨ スイス紀行

それから七年後の一七九七年に三回目のイタリア旅行を企てたが、この間にフランス革命とこれに連動したナポレオンの台頭の影響を回避することはできなかった。本来はイタリア紀行であった計画がスイス旅行に縮小される結果を招いたのである。

この第三次スイス旅行については、資料収集という目的に合わせたものだけあって、詳細な日記が遺されているが、本稿の関心の範囲を超えており、コースが一回目の反復でもあることに加え、紙幅制限もあり、叙述の対象から外した。



テキスト及び参考文献（ ）内は引用上の略語

1. Goethes Werke in 143 Bänden (ZV). Deutscher Taschenbuch Verlag, 1987. Foto-mechanischer Nachdruck der Weimarer Ausgabe.
2. Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke in 18 Bänden. (VW). Artemis Verlag 1977.
3. Johann Wolfgang von Goethe: Werke in 14 Bänden. (HV). Hamburger Ausgabe 1966.
4. Karl Otto Conrady: Goethe :Leben und Werk. 1987, Athenäum Verlag

注

- (1) HA-X, p.125-153ff
- (2) WA-III-2, p.1-7.
- (3) WA-IV-3, p.188-197.
- (4) WA-IV-3, p.197-203.
- (5) HA-X, p.325-335.
- (6) WA-I-1, p.308. 金持たや (Reichen) : 誤植。正しくは: マネサキ (Reiner)。
- (7) WA-I-1, p.64. ihre Reiche (その諸國)。これを die Reichen (金持たや) と混同してはならない。
- (8) WA-III-1, p.98-104.
- (9) WA-IV-4, p.62-137. 金持たや AG-XII, p.9-66.
- (10) WA-IV-8, p.7.
- (11) AG-XI-p.206-237.
- (12) WA-IV-8, p.207.
- (13) WA-III-1, p.332-333.